

私の隣人（となりびと）

奨励	渡辺 誉一〔わたなべ・よいち〕
奨励者紹介	日本キリスト教団平安教会牧師

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。『「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」とあります。』イエスは言われた。「正しい答えた。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもつとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

（ルカによる福音書 10章25—37節）

命の危機と信仰の危機

大変有名な「善きサマリア人」の箇所。このたとえの背景には、旧約聖書の時代に南北へと分裂した北イスラエルと南ユダとの間にある、政治的・宗教的・民族的な深い溝があります。

助けられたユダヤ人と助けたサマリア人には、相容れない隔ての壁があります。命を助けられたユダヤ人が、もし他のユダヤ人にこのことが知れたのなら「なぜおまえは、サマリア人などに助けられたのか、恥ずかしくないのか」と軽蔑されるでしょう。同様に助けたサマリア人も、もし他のサマリア人に自分のしたことの一切が知れたら「なぜおまえは、ユダヤ人を助けたのか、自分のしたことが分かっているのか」と非難されてしまう深い溝があるのです。何か現代の世界情勢を見ているようです。

そして「エルサレムからエリコへと下る途中」という状況設定は、このユダヤ人が熱心な信仰者であったことを伝えています。地方からエルサレム神殿へと礼拝を捧げ、帰路に就いていたのです。

信仰をもっていれば、人生は順風満帆なのでしょう。いえ、思いも寄らないことが起こります。突然の出来事は回避することはできません。強盗は彼を襲い、衣服をはぎ取るだけでなく、殴りつけ半殺しにしました。そして彼は「どうして、私がこんな目に遭わなければならないのか。よりによって神様を礼拝した直後に、神様、どうしてなのですか、私が一体何をしたのですか」と思ったことでしょう。

すると、祭司が現れました。ところが祭司は彼を見るなり、避けるように反対側を通り過ぎていきました。次に通りがかったレビ人も同様でした。神に仕え、神殿に仕える祭司とレビ人の取った態度は、彼にどのように映ったのでしょうか。おまえは、常日頃、祈りが足りないからだ、おまえの信仰が薄いからだ、と映ったのでしょうか。立ち去る祭司とレビ人の背中を見つめながら、自らの信仰の至らなさを嘆いたのでしょうか。それとも、神の存在が薄れていくのを見たのでしょうか。信仰がガラガラと崩れ落ちる音を聞いたのでしょうか。襲われた人物は危機に陥っています。彼を襲ったものとは一体何でしょうか。ここには命の危機と信仰の危機が、同時に描かれているのです。

共に苦しむ神

話は変わりますが、ユダヤ教の教師でハロルド・クシュナーという人が『なぜ私だけが苦しむのか 現代のヨブ記』（斎藤武訳 岩波書店 1998年 同時代ライブラリー）という本を書いています。

クシュナーは、伝統的なユダヤの律法厳守にたった信仰をもっていました。律法を厳守すれば祝福にいたるという信仰理解です。しかしある時、彼は突然、理不尽な、胸が張り裂けるような苦しみに直面しました。

彼の一人息子、アーロンといいますが、若くして急激に老いていくという原因不明の病にかかってしまったのです。アーロンは、日に日に白髪になり、腰は曲がり、その顔にはしわが深く刻まれていきました。彼はうろたえます。こんな事態が起こり、一体どうすればいいと言うのか。なぜなのか、神を信じているのに、神の戒めは厳守しているのに、正しいことを心がけているのに、日々祈りを欠かさないのに、なぜ、自分にこのような事が起こるのか。

クシュナーは苦しみのなかで、次第に神を恨みました。追い打ちをかけるごとく友人たちは、彼にあれこれと言います。祈りに熱心さが足りないとか、祈りが聞き入れられないのは、あなたが相応しい人間ではないからと言われます。また、この試練はあなたが重荷に耐えられない人間だからだ、と言われますがどれも慰めにはなりません。それどころか、彼を更なる苦しみと信仰の懷疑、崩壊へと追いやっていきます。そしてついに息子・アーロンは、14才の誕生日を迎えた二日後に、老衰で息を引き取りました。

人はどうして神を信じるのでしょうか。神が完全な存在だからでしょうか。ふりかかる不幸や悪から私たちを守ってくれるからなのでしょうか。神に背くと家族や自分に悪いことが起き、また自然災害を起こして、ひどい目に遭わせるからなのでしょうか。ハロルド・クシュナーは、深い苦しみのなかで気づかされました。神が神たるゆえんは、人と共に苦しみ、共に悲しんでくださるからこそ神なのだ。息子・アーロンが経験している苦しみや痛みを共に負うてくださっているからこそ、神は神なのだと思えていきます。

自分の立場や自分へ向けられる非難を省みず、共に苦しむことを選んだサマリア人、手を差し伸べ、苦しむ者を背負って行ったサマリア人こそが、このたとえを語られているイエス・キリスト自身であることをこそ、私たちは、しっかりと心に刻み込みたいと思うのです。

悲劇に直面したとき

さて、今世界は宗教同士の対立によって、愛なる神の存在が薄れています。一方、人間の力を超えた大きな自然の力が恐怖と捉えられ、そこにも愛の神は不在と感じられています。久しく語られてきた「神不在の時代」が、ますます強まっています。

皆さんと共に東日本大震災へと思いを馳せていきたいと思うのですが、その前に一つ、少なからず時代・状況の共通点があるのではないかと考えて、ウラジミール・ジャンケレビッチという、ユダヤ系ロシア人を両親にもフランスで生まれた倫理学者の言葉をご紹介します。ご紹介する言葉は、第二次世界大戦直後、東ヨーロッパのユダヤ人社会がナチスによってほぼ壊滅状態にあり、生き残った西ヨーロッパのユダヤ人達が自失状態に陥った時のものです。自分たちが「ユダヤ人であること」に意味を失った時でした。「わたしたちはお互いに、ここに生き残りとしているというこの他に共通点を持たない。（中略）まだ生きているということである。偶然によってわたしたちはここにいます。（中略）その理由は分からない。恐らくグシュタボの不注意のおかげで・・・何が起きたのか、わたしたちには分からない。それでもわたしたちは生きて帰って来た。（注、ここまで本文より引用。以下訳者あとがきより引用）自分は生き残った。生死を分かった理由が何かを生き残ったわたしは知らない（おそらく理由はない）。だから、わたしが生き延びた理由をわたしはこれから構築しなければならない。わたし自身が、わたしが生き残ったことの原因はこれから行動を通じて基礎づけなければならない」（エマニュエル・レヴィナス著 内田樹訳『困難な自由』国文社 2008年 232頁・388頁）。

昨年3月11日に起こった東日本大震災による巨大地震は、町を、建物を破壊しました。地震による津波は、一瞬のうちに愛する者や故郷を飲み込んでいきました。それは「神の行為」なのでしょう。

アメリカのコロンビア大学で神学を教えているベン・キャンベル・ジョンソンという人が、『Rethinking Evangelism, A Theological Approach, 1983（＝これからの福音宣教像―神学と方法の再考）』（吉田信夫訳 日本基督教団出版局 1996年）という著書のなかで、人間の存在意味について「それは人生の危機に現れる」と語っています。「失望や死や大災害によって、生活が崩壊し、人間が構築した世界がバラバラになる時です。人間が虚無の中に沈むように思われるその時に、一つの支える力が現われます」と語っています。

東日本大震災では町全体が破壊され、罪なき大勢の人びとが奪われました。誰もが途方に暮れる状況下です。しかし、身の危険も顧みずに見知らぬ人々を救おうと全力を尽くす人びとがいます。再建の目的が立たないなかで、それでもなお再建への努力を惜しまない人びとが立ち上がっています。普段は自分のことばかりを考えている人が、緊急事態において自己中心的ではなく、我が身を削って被災者のために献身する姿へと変えられています。

未曾有の災害のなかで、誰もが「神も仏もない」と嘆くでしょう。しかし、心の奥底から沸き上がってくる痛みや悲しみは、どこからくるのでしょうか。我が身を顧みないボランティアは、一体どこから現れてくるのでしょうか。

神の一部が輝き出す

先ほどのハロルド・クシュナーは言います。「そのような感性は神からのものではないのだろうか」。神は人間の心の中に「神御自身の神性のほんの一部を植えてくださり」、苦しんでいる人を見て抱く「思いやりの感情」は、神が人間の苦しみに見る時に感じる哀れみの反映なのではないだろうか、人を哀れむという感情こそが、神の心が私たち人間を通して現れたものであり、これこそ神の存在を示す最も確かな証明なのだ、クシュナーは宣言します。（前掲書 211頁）

私たちの側には、隣人となることを欲し、天より舞い降りたイエスがいてくださるのです。私たちの苦しみや痛み、悲しみを共に負い、歩んでくださる方なのです。十字架の上で自ら命を捨て、私たち人間の苦しみに一体化されようとするイエスが、途方に暮れるような絶望のなかから復活の姿をもって立ち上がってくるのです。「全てを尽くし、神と人を愛せ」、全てを捧げて私たちを愛されたイエスが、私たちの隣人であり、神の憐れみなのです。

「行って、あなたも同じようにしなさい」。神不在の時代に、命と心の危機の時代に、信仰の危機の時代に、神から与えられたものを証しする使命が、今、私たちには与えられているのです。教会であろうと学校であろうと、キリスト教を冠するものは、イエスの業に参加するようにと促されているのです。私たちに植え付けられた、私たちに宿っている神の一部が光り輝きますように、共に祈りを捧げたいと思います。

2012年4月18日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録